

## 言語は身体に何をなしうるか——初期アントナン・アルトー作品の身体表象における«terme»に着目して

宮崎悠暢(早稲田大学)

アントナン・アルトー(1896-1948)は、フランスの詩人・劇作家・俳優である。アルトーにおける身体の問題は文筆による活動を始めたときから最晩年に至るまで重要な問題であり続けた。アルトーにおいて初期から後期へという研究上の時期の区分は明確ではないが、仮に「ジャック・リヴィエール(1886-1925)との往復書簡」(アントナン・アルトー『アントナン・アルトー全集1 神経の秤・冥府の臍』清水徹・栗津則雄訳、1977年)からのテーマが「ジョルジュ・スーリエ・ドゥ・モラン(1878-1955)宛の四つの手紙」(Antonin Artaud, *Œuvres*, 2004)にまで通底していることをもってここまです初期とするならば、初期のアルトーにおける身体表象の特性を同様に問題になる精神と思考との関係のもとで明らかにしなければ、1937年以降の理念的な身体を経験的な次元とは別の水準で思考していく晩年のアルトーのエクリチュールも正確に捉えることはできない。したがって、本発表の第一の企図は、初期アルトーの身体表象を精神と思考との連関においてその断片的な性格を損なうことなく統一的に示すことである。

一方で、とりわけ「神経の秤」(アントナン・アルトー『アントナン・アルトー全集1 神経の秤・冥府の臍』清水徹・栗津則雄訳、1977年)に出現し、「ジョルジュ・スーリエ・ドゥ・モラン宛の四つの手紙」にも登場する語である«terme»は、その両義的な性格から、清水徹らの既訳では「用語=限界」、「局限」という訳が与えられてきた。極めて訳出が難しい語である以上仕方のないことではあるが、これだけを取ってみても意味は不明瞭である。本発表は、この«terme»という語が出現するのは、アルトーにとって身体の緊張(こわばり、どもり、痙攣)が最高潮に高まった結果、発話される思考の統語論的構造が解体される瞬間なのではないかという見立てを取る。したがって、本発表で追求されるべき第二の点は、«terme»という語が出現する条件を見きわめ、それが身体と思考の言語化という観点からどのようにアルトーのテキストの内部に位置づけられるかを明らかにすることである。

第一の点も第二の点も、前者は身体をいかに言語化するか、後者はある語が身体の何を表象するかという点で、言語と身体の密接な関係を問うものである。最終的には、間テクスト的な読解から、アルトーという作家が彼の文筆キャリアの初期において自身のエクリチュールで何を表現しようとしたかを浮かび上がらせることが目標となる。